

1985. 2. 28 発行

No. 74
 あごら札幌連絡先 通信担当
 今村 雅子 細谷 洋子
 ☎ 683-9594 ☎ 823-0738

今日のなかみ

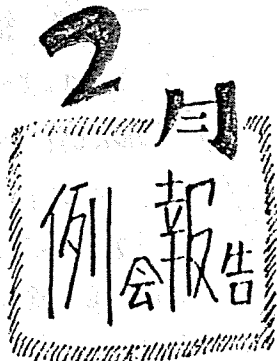
2月例会報告	1	非核の意志を自ら家から	
怪傑! ハウスワズバンド哀話	2	地域からそして国へ	5
新聞切り抜き	4	私とあごら	6
運営委より	4	託見考 No. 21	7
		3月例会案内・情報	8

興味のあるテーマだったのか、最近では珍しく17名ほどの出席があり、話し合いが〇し。

まずレポーターが「怪傑! ハウスワズバンド」の本の内容を紹介し、役割分業について一人一人どう考えるか、旨に話してもらった。答えやすいように、①役割分業のない生活は理想。それにむかって努力中。②頭ではわかるが実際はできない。③今の生活を変えたくない。の3つの中から選ぶ形で答えてもらった。②が多いだらうと予測していたのだが、ほとんど①だったのには〇りした。(①と②の間という人も何人かいた。分け方が単純だったせいかなあ。) レポーターとしては、②が多いだらうと思っていたので、なぜ頭ではわかって実際はできないのか、何がネックなのか、どうしたらできると思うのかということを中心に話していきながら、具体的に個々の参加者の夫あるいは恋人との家事分担の話とか、現状の生活の話が中心になり、深いところまで話し合えなかった。

性別役割分業について考える

職種で多少の差はあるかもしれないが、フルタイムで働いていれば、男であれ女であれ、残業を拒否したり仕事を休むことはなかなか大変なことだ。本にも書いてあるが「出世もあきらめなくてはならない、職場の冷たい眼にも耐えなければならぬ、給料や退職金が少なくなるかもしれない」と。個々にとって、仕事をするとすることはどういうことなのか、週刺労働(毎日残業し、休暇はほとんどとれない)かあたりまえの今の働き方をどう考えるのかということになってくる。(一方で、時間は短いかもしれないが、保障も給料も極端に少ないパートの問題もある。) 結局は、私達がどういう価値観をもってどういう暮らしをしていきたいかということにかかってくると思う。このへんを煮詰めてもらって話し合いができたらよかったです。



と思った。

例会が終わったあと、参加者の一人に感想を聞いたところ「夫とはかなり家事分担をしていると思うが、他の人のように①ですと明解に言えないのは今の生活レベルを下げられるだろうかと自問するからだ。今の生活レベルを下げないで村瀬夫妻のようなことはできるの

か？ 人並に暮らしたいというのはどういうことか、等々考えている。」ということだった。

このような発言をもとに激論を聞かせてみてはいいですねー。私達は本当にどういう生き方をしたいのかと。

(細田英理子・記)

拝啓 細谷洋子様

今冬はことのほか寒さ厳しく、風邪のウイルスも健やかな様子。我が連れ合いと二人の娘たちも枕を並べてあえなくダウン。このような時にこそ万難を排して看病に専念するのが、日頃連れ合い側に片寄った家事育児の負担割合を挽回するチャンス。大いに活躍すべきところでありました。

が、しかし年度末にさしかかった繁忙期、看病どころか日曜出勤さえ避けられない始末。義姉に助けを求めたり、はたまた先日のように細谷姉様にお世話になりました。次おであります。

新ためてお礼申し上げますとともに、心から反省の意を表します。

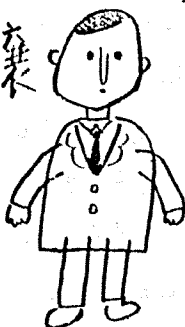
ところが、このように申し上げた舌の根も渴かぬ内の大失態。ひたすら恐縮のさわみにおりましたところ、紙

面提供の上、弁明を許すのご高配を賜りました。

以下、一般的な会社人間の素態とその一頁である

渡部謙

弁明の記



怪傑! ハウスバズ ハズバズ 老話

私の限界をさらすことで、弁明いたします。なお、これは現状肯定したり、好意的な理解を得ようとするのが目的ではなく、あくまでも問題の所在を明らかにし、少しでも改善、進歩(?)するための素材とするものです。念のために申し添えます。

さて、くたんの大失態とは、連れ合いに対するおごら例会出席保証違反であります。それ故、例会には、小うるさい餓鬼二匹も参加することとなり、皆々様方には多大なご迷惑をおかけいたしました。

これでは何故、月1回の、しかも13日は、はっきりしている例会日すら保証できないのか。答は単純明解。「失くしたくない」からであります。例えば「給料を…」、「名刺を…」、「地位を…」といった具合です。イメージが湧いたところで、「義理を…」

「人情を…」、「信頼を…」であり、さらに「知識を…」、「意義を…」、「価値を…」となるわけです。

問題は8時間労働で、いや13日だけで8時間労働で仕事を切り上げても「…を失うことになるのか？」ということでしょう。連水合いの例え出席保証と4時間の残業。この相対比較で、私は後者を選擇したわけでは。何故か…？

こんな例はいかがが？ 夕飯時を前にして突然の断水。早速、水道工事屋さんに電話。日勤のAさん、帰りかきに修理依頼を受け悩む。夜勤要員は出払い、作業要員はAさん一人。電話口で「家庭団欒かメチャクチャよ云々」の金切り声に負け、あわれ今夜もAさんは昨日に続いて時間外勤務となった次第。

この例からいくつかの問題を挙げてみると

- ① 水道以外に、例えば井戸のような代替水源を持ってない現代生活では、いったんトラブルが起きるとパニックを来す。
- ② しかも何故か断水にみまわれた人は、修理屋さんも自分と同じ人間であることを簡単に失念し横暴になれる。
- ③ Aさんの会社は中小企業であり、夜勤要員を多数用意する程の余力はない。人員の増員は、即Aさんたちのノルマアップが給料減に結びつく。もう少し大きな会社だったら、下請会社に押しつけて、別なAさんが生まれるだけの話。

さて、この例の場合、①「水道」とは時として断水するものだから、常時一日分くら

いの溜水をしていけば、あわれなAさんは出現しなかったことになります。また、②一晩くらい水なしでもいいとしましょう。モクとミカンの夕食もオツなもの。明日は仕事を休んで洗濯をしよう。といった、おおらかさを持つことができれば問題は起きないのです。さらに、③「私の勤務時間は終わりました。同業者をお知らせします。皆だめだったら、明日9時まで我慢してください。」と言うことができれば、Aさんは予定通り楽しい夜を過ごすことができたのです。

ヨーロッパのどこの国、アラブのある国でなら不思議でもなんでもないことですが、ニニ日本では仲々このようにはゆかないような気がします。何故か？ ひとつだけ言えるのは、今夜の「Aさん」は、明日の「断水で電話した人」になり得ること。当然、逆も。

ニニにひとつの「労働観」のようなものが見えてきます。「労働」といった言葉では、スパッと割りきれないバトバトした何か。相補的な「依頼」と「奉仕」。この絶妙のバランスを崩した時、何かを「失くす」のです。まさに同じの原点です。しかし、この前の13日は聞かず連水合いに「ツケ」を回したわけでは。

どのように自らを鍛えてゆくの？ 全く五里霧中ではあります。まずは「怪傑！ ハウスバズバンド」を読むことから

はじめましょう。

とりあえず以上

新聞切り抜き
—さっぽろ通信が北海タイムス
に紹介されました—

〈全国運営メンバーについて〉

昨年夏、小樽にて「あごら全国運営会議」が開催され、一人の運営委員も出していないながら、札幌のメンバーも多数参加しました。会議の様子は二度にわたって「月刊あごら」(90号、93号)に掲載されましたが、今「あごら丸」は沈没寸前の状態にあります。

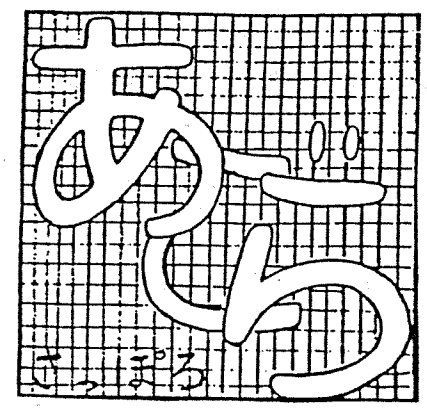
「あごら」が創刊されて今年で13年。この間いろいろなグループ、雑誌が出ては消えていきました。一口に言って「つぶれない方が珍しい」ということです。

これまで、毎年度初めに、札幌からも運営委員をという事務局からの要請を受けながら、その荷の重さに引き受けられず、どちらかと言うと、情報(本)の受け手で(年1回月刊の編集はしてま

したか)事務局も遠い存在でした。しかし、「あごら丸」の実情がこまできた今、「あごら」を存続させ、より発展させるために、札幌からも運営委員を出して、物心両面、積極的に「あごら」を担っていくということになり、今年度は細谷さんが引き受けてくれることになりました。とは言っても個人で委員になるには荷が重く、それこそ、あごら札幌として委員を送り、直接的にはその人を物心両面、札幌の会員が支えていきたいと思ひます。そうすることで、遠い存在であった事務局も身近になるのではないかと



とも思ひます。皆さんの御賛同を期待します。3月例会でも話し合いたいと思ひますので、当日出席できない方は、事前に御意見をあよせください。
(高橋 芳恵・記)
(4)



通信。ほかの地域では、毎月例会報告で終わる「あごら」の通信を出して行くくらいだが、札幌通信は全国でも際立った存在なのだそうだ。



視野を少しでも広く
家事から政治まで対象



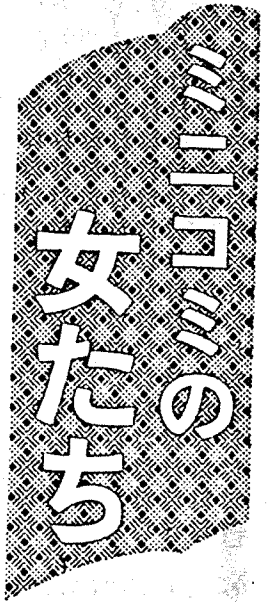
「あごら札幌」運営委員メンバー。右が今村雅子さん

「あごら札幌」の委員は、現在約五十人。例会には出られないが通信だけは読みたいという人が三十人いる。編集は毎月の通信担当者と、その

「あごら札幌」の委員は、現在約五十人。例会には出られないが通信だけは読みたいという人が三十人いる。編集は毎月の通信担当者と、その

全国に九百人の会員を持つ「あごら」。女性問題を話し合い、行動するグループだ。北は旭川から南は佐世保まで、十四地区に散らばる拠点グループが持ち回りで月刊「あごら」を編集しているが、この紹介するのは「あごら札幌」が独自に毎月出している

女性のミニコミ誌がいま面白い。子育て、自立、離婚、教育、歴史、日常生活などいろいろと履き足す、女性ならではの視点で、おもしろい女性をきいていく。札幌で、全国でミニコミを作る女性たちの活動を紹介します。



一昨年、道内各市で開催された原爆資料展の言い出しっぺ、岩見沢在住の飛塚優さんを迎えて、〈非核宣言をめぐり札幌市民の会〉発会の集いが、2月24日、北区民センターで開催された。

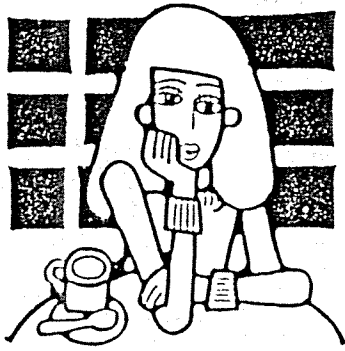
3年前に広島から、鞍馬岩見沢へ、「宣言」のフィルム本を携えての来道だった。知る人もない岩見沢で、電話帳を頼りに、「映画を観ませんか」と呼びかけたという。既成の平和運動が、政党や労組

非核の意志を自ら、家から、地域から、国から

など、いろいろな団体の思惑がからんで窒息状態になっている今、そうした規制をうけない市民レベルの運動を作り出していく必要性を痛感して運動へ。議論の余地、路線の違いをふくみこんでいく余地を持つことか、運動を広げていくのだからと、会をつなげる(5)

(4)のは「核戦争によって殺されたくない人、死にたくない人」という一点。原発や安保のことは、この一点をおさえながら議論していくという。

正直なところ、北の頃は、署名運動や陳情・請願などの行動がどれほどかになり得るのだろうかという寂れを感じていたのだったが、決して話上手とは言えない飛塚さんの話に、何故かひとく感動した。私はどうして感動したのだろうか。機会をあらためて書いてみたいと思う。(細谷 洋子・記)



No. 22

石原 綾子

私 と あ ご ら

会員の皆さんが書かれた「私とあごら」を拝見して、皆さんが生々しい生きざまの上であごらとかかわっていらっしゃるのを知りました。その点、私は生きざまはさておいて、仕事で接触しました。あごら札幌の生みの親、山口里子さんに「女性運動の一環として、あごらを取材したい」と申し込んだのは、昭和48、9年だったでしょうか。身代がさだかではありませんが、道内での女性運動が芽生え、やっと伸びかけたころで、まだ興味本位に見られているころでした。それに女性のフリーライターと名のる者が突然お電話をしたので、山口さんは、また興味本位に取材されるのではないかと懸念されたようでした。この時の取材はスポンサーの都合で陽の目を見ませんでした。これを機に山口さんとの交流が始まり、何かにつけてあごらの活動を取材させてもらいました。それで会員の方たちには私も会員と思われていましたが、私は長いこと外部の者として取材者の目でかかわっていました。

というのも、私の問題意識はいつも仕事に関連することに向けられて、女としての生活は、親として息子に任送りすることに限られていたからです。私の中での女の問題は、仕事を持つ前に多少ともふっ切っていましたので、例会での皆さんの発言や意見は「女の歴史」を繰り返しているようで、とてもつらいものでした。でもその一方で山口さん始め皆さんの意識の高さに驚いたものです。

こんなふれあいで、「あごら」とかかわり、仕事上で大変恩恵を受けました。女性として解決しなければならぬ問題が例年ごとくとりあげられる時、大分早く生まれた者として何かアドバイスしたいと思いつながら、私自身の解決法があまりにも変形なので、助言できませんでした。この点、申し訳なく思いますが、せめてものお返しは、あまり人目にはふれない月刊誌でしたが、あごらとあごらの活動を正しく書かせてもらったことでしょうか。

いま私は会員の端くれに入れて頂いていますが、出席も発言もゼロという不良会員です。こんなぶざまな会員ですが、山口さんを通して「あごら」を知り、昔の女たちが没せざるを得なかった問題に、しっかりと目を注いでいる会員の皆さんにふれて、身勝手ですが、大変よかったです。60歳を越えたこれからの私は、老人問題をわが身として受けとめる立場になります。介護者からされる側に移ったわけですが、これからも皆さんのお知恵を拝借したいと思っています。

補足のつめ。

託児ボランティアについて、やはり予期していたような誤解があったようである。多少の問題点はあっても、ボランティア講座等があることにより、託児に限らずそうした様々な問題の存在が、広く市民に知られたることの意義は大きいのではないかという指摘をいただいた。全くそのとおりだと思う。私は、行政がボランティア講座を開くこと、●を少しでも社会に役立てたいとボランティアに従事すること、そのものを否定したつもりはない。行政が、土からボランティアを組織することの問題点を指摘したのである。

1949年6月に制定された社会教育法には、「社会教育とは、本来、国民の自己教育および相互教育であって、国家が指揮・統制・推進するべきものではない。国家の任務は、国民の自由な社会教育活動に対する側面からの援助・奨励・奉仕である」とされている。

にも関わらず、わずか2年後には社会教育主事がおかれ、「求めに応じる」原則はなしくすしにされ、積極的な指導性は「かりか」強められて今日に至っているがボランティア活動の原則も、この社会教育の原則とピッタリ重なるのではないだろうか。というよりも、社会のひずみを越えるべく行われるボランティア活動は、社会教育そのものであると言った方が良くもし

れない。

そうした原則に立って、自主的ボランティア活動に対する援助、奉仕としての行政による講座の開設や場所の提供等は、ほとんど行われるべきだと思う。

しかし、現状では、講座を受講するとすぐボランティアとして行政に組織され、良いことをしているのだと持ち上げられて、全体を見えなくさせられやすいのではないかと思うのである。

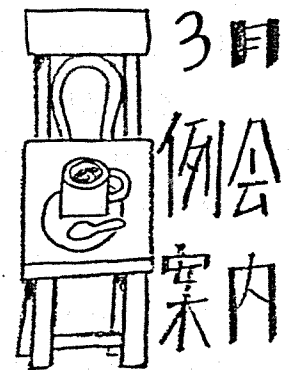
私たちが婦人文化センターや青少年婦人部に望みたいのは、いろいろな遊びの手ほどきやケガの応急処置、児童心理等々、託児に必要な知識や技術の講座を交換条件なしに提供してくれること、主催事業の託児のあり方に、私たちの声を反映させてくれること。

そうして身につけた知識や技術を活用して、私たちは自主的に、行政サービスの肩代わりではなく、真に私たちが担うべき部分を担っていこう。例えば、民間主催の催しの託児協力を。法令制限を越える試みへの協力を。地域での小さな子どもたちの預け合いを……。そうした広がりや深まりは、自分の子どもが大きくなって子連れというハンディがなくなっても、障害をもった人やお年よりなど、様々なハンディを有した人たちと共に生きる社会へと、私たちが導いていってほしい。

(細谷 洋子・記)



- 3月13日(水) PM 6:30~9:00
- 場所 喫茶ニドリ2F
(中央区南4西1 須貝ビルの並び 南西角 TEL 231-7627)



『男女平等と家庭科教育』

あなたにとって、学校で習った「家庭科」とは何だったか？
 男も女も共に生活者として自立し、男女平等を育てる「理想の家庭科」教育とはどのようなものか？
 雑誌「新しい家庭科We」を参考に話し合い、家庭科教育検討会議の答申の課題点(男女とも選択必修等)を考えてみましょう。(情報をお持ちください)

<レポーター>
 佐藤 陽子
 <司会>
 高橋 芳恵

● 第75回国際婦人デー「平等・発展・平和」
 第27回札幌集會

—男と女・ともに生きて—
 中島通子(弁護士)

3月8日(金) PM 5:30前場 6:00開会
 自治会館 5Fホール
 (北4西6) ※日本婦人会議他主催
 参加費 300円

証見あり(事前に申し込みを)

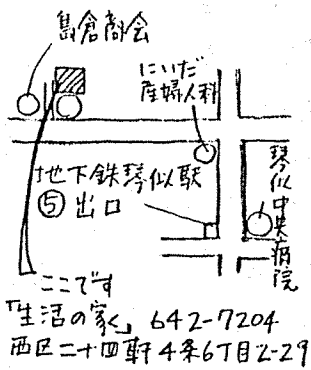
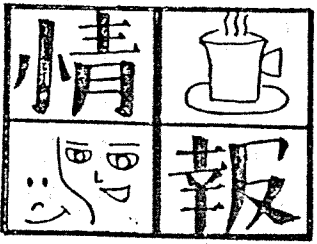
● 古本市+子ども本
 リサイクルバザー

3月10日(日) 10:00~2:00

コーヒーやおしるこも用意しました。
 共催の団体は、今回「生活の家」を応援します。

<共催団体>

- 生活の家
- 草の葉共働かサービス
- メビウスの会
- ミニコミ喫茶 ひらひら
- とよひらリサイクル



★この春、転勤福が今村さんをご直撃し、東京へ転出することになりました。あこられ様の強かな担当であつただけに、お連れ合いさんをうむもあり、不買運動でもおこなったくらいの気持ちです。(ソコソコヤメテ? 札幌に産れる可能性がなくなるリー今村) できれば、欠員をうめるべくごなにか運営委員に立候補してください。(芳恵)

★<怪傑ハジメズバンド豪語>をめぐる、紙上論争をしたらごどかしおもしろいぞ。反論、同情その他モロモロ、ぜひぜひお寄せください。なお、あこられ様の例会に子ども連れで出席してはいけないうちになつてはいるわけでも、私が渡部家の2人の子ども達をいびつたわけでもありません。念のため。(細谷)

あとかき